

大学における学際的海洋教育に関する研究

福島朋彦 海洋アライアンス

私たちは小学校から大学まで様々な教育を受けてきた。学年があがるにつれて、内容は高度になり、教科は細分化されていった。例えば小学校では国語・算数・理科・社会を学んでいたものが、中学の社会は歴史と地理になり、高校の国語は古文と現代国語に分かれた。大学に進むと、さらに多様化した授業科目が新入生たちを待っている。

細分化、という点では研究の歴史も共通する。デカルト以降の近代科学は研究領域を細分化させながら成果を積み重ねてきたといわれる。自然科学の一部であった生物学が、生態学、分子生物学、遺伝学、数理生物学などに分かれ、ある分野は地球環境の将来を予測し、別の分野は細胞の機能を解明するようになった。

研究と教育を使命とする大学では、上記のような、細分化された研究と教育を行っている。これを高い専門性ともいう。しかし大学を卒業し、実社会に入ると、細分化された学問を再び統合したり・組み合わせたりすることによって、その時々課題に対応するように

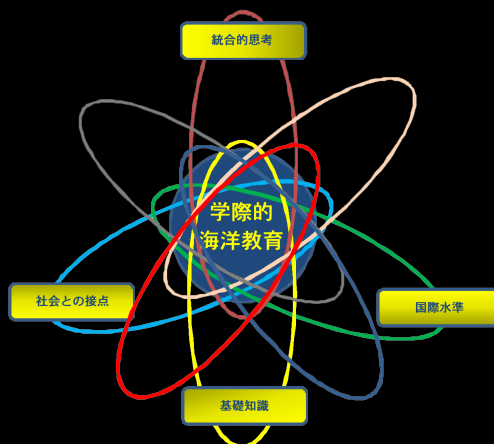
なる。それを応用と呼ぶ。例えば船を一隻作るにしても、浮力、強度、推進力、安定性などの工学的知識のみならず、経済性、快適性さらには法的基準に関する知識が土台となっている。知識の統合・組み合わせは実社会では必要不可欠である。

話を大学に戻すが、大学には設立時の様々な目的がある。例えば、東京大学農学生命科学研究科の前身は、明治20年に農業に関する総合教育を目的として設立された東京農林学校である。この例に限らず、大学には多様な歴史を背景にした多様な使命がある。これらの多様性は尊重されるべきである。しかし一方で、学問は大学の垣根とは関係なしに、互いに協力し、時には競い合って発展してきた。

すなわち、ある分野の学問を発展させるには、それを行う大学ごとの個性を認めつつ、大学間で共有すべき内容を明確にすることが肝要である。大学における学際的海洋教育に関する研究の目的はここにある。



彼も、彼女も、大学では専門性の高い細分化された知識を学んでいる。やがて社会に出て、統合と組み合わせを覚え、直面する課題に対応することだろう。



学際的海洋教育と領域の要素。